

令和五年度

滝川第二高等学校 入学考査 問題

(二次)

国語

(五十分・百点)

注意事項

- 1 問題は1ページから17ページまであります。
- 2 解答は、すべて解答用紙の枠内に記入しなさい。
- 3 「開始」の合図があるまで問題用紙は開いてはいけません。
- 4 受験番号を解答用紙と問題用紙に正しく記入しなさい。
- 5 「終了」の合図で筆記用具を置き、監督の先生の指示に従いなさい。

受験番号

受験番号				

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(指定された字数に  
は、句読点その他の符号も一字として含みます)

目の前にリンゴがあるとき、「これはリンゴだ。リンゴは食べる  
ものだ」と思うのが認識 recognition です。つぎに、食べようとか、  
食べないでおこうとかの判断が出てくると、それが思考 thinking  
になるのです。そして、食べたとか、食べるのをやめておいたとい  
う ① につながります。

思考とは、結果として判断が出てくるような、そういう脳のはた  
らきを呼んでいることが多いようです。とくに神経科学者が「考え  
る」という言葉を使ったときは、ア だいたい判断につながるもの  
で、「〇〇はこれなんだ」と思うだけの作業はその中に入らないよ  
うです。これは何だということまでは、認識 recognition であっ  
て、思考 thinking ではありません。それが ② 一般的な神経科学の  
定義になっています。

考えるときにはたらいっているのは、※ 前頭葉です。

(中略)

脳の中には自分のもっているいろいろな記憶があります。体験し  
た出来事のエピソード記憶も、知識にあたる意味記憶も、技能にか  
かわる手続き記憶もあります。ある状況になったとき、それらの記  
憶で必要なものを、一度前頭葉の前頭連合野にもつてくると同時

に、見えるもの、聞こえるもの、触れるものという現実の感覚情報  
をもつてくる。そして、この場合どうしたらいいかという選択をす  
る。そういうことを「thinking」(考える)というのです。

自分がすでもっている記憶情報と外から入ってくる感覚情報と  
を同じ場にもつてくる、その必要に応じて集めてきた情報、あるい  
はその情報を処理する場を「③ ワーキングメモリー」と呼んでいま  
す。作業記憶ともいいますが、ワーキングメモリーとカタカナで書  
いている人のほうが多いです。

ワーキングメモリー＝短期記憶といわれることもあります。短期  
記憶は、たとえばAさんに電話しなければならぬとき、Aさんの  
電話番号を知らないで、その場にいる人に電話番号を聞いて、電  
話をかけます。電話をかけたなら、その場でAさんの電話番号は忘れ  
てしまいますね。こんな電話番号が短期記憶であり、私がいうワー  
キングメモリーとはちがいます。しかも、この短期記憶は脳の学習  
に関しては、イ ほとんど意味がないので、本書では使いません。

このワーキングメモリーが、「考える」ときの中心的な役割をは  
たしています。そこで何がなされているかという点、感覚情報とし  
て入ってくる現実世界のいろいろな情報に対して、自分はどうはた  
らさかけるのが最良か、a ダメって見過ごすのか、それを捕まえる  
のか、あるいは逃げるのかという行動選択をしているのです。

そのときに ウ 必要な情報のうちで、とくに、過去に似たようなも

のに関して失敗した事実、<sup>④</sup>マイナスの記憶はとても大事です。

I、あるものを見たとき、それに触って痛い思いをしたり、それに刺されて痛い思いをしたなら、すぐに逃げる。逆に、食べたらいちがかったという経験があれば、捕まえて食べるという行動をします。

これについて、名古屋大学の心理学者・齋藤洋典先生さいとうひろかみがおこなった、おもしろい研究があります。

齋藤先生は、大学生たちに自分の思い出せるかぎりの、一〇歳ごろまでの記憶を全部書き出してもらい、よい記憶には○、不ユカいな記憶には×、どちらでもない記憶には△、をそれぞれつけてもらいました。すると結果は、○△×の割合が六対一対三になったのです。<sup>II</sup>、いやな記憶が全体の三割ぐらいを占めていたのです。

そんなにいやな記憶をなぜもちつづけているのかというと、先の「※感情の荷札」がついているからということもありますが、もう一つ、行動選択をするときに大きな役割をはたすからだと思います。ワーキングメモリーで行動選択をしようとするとき、まず×の記憶が出てきたものは<sup>I</sup>すべて選択しない。すると選択すべき範囲が狭まり、早く選択できることになります。選択肢全部について一つ一つ、するか、しないかを判断していたら、時間が大変かかってしまいます。だから、<sup>オ</sup>ともかく×はやらないとすれば、選択肢が

減ります。そのために、失敗の記憶はひじょうに大事なのです。

「失敗は成功の母」といいます。それは、昔から人間の行動としてよくわかっていることです。前頭連合野がワーキングメモリーのはたらきをはじめたときに、まずマイナスのエピソード記憶につながる選択は全部キャンセルしてしまう。残ったものだけで、どうするかを判断しているのだらうと思います。つまり、マイナスのものは捨て去って、残ったものの中からいちばん有利だと考えられるものを選択する。それが「考える」ときの一つの重要なはたらきです。

そこまでは判断で、そこで行動を起こしてみると、成功か失敗か、結果が出てきます。たとえば、おいしいものだと思って口に入れてみたら、苦くて食べられない。ペツペツと吐き出したとします。すると、そのことが新しい除外<sup>c</sup>項目として、エピソード記憶の中に入ってきて、二度とそういうものに手を出さないようになります。

このように、未来は、過去を基準にして、自分の判断で選び取るものです。社会で起こっている現在の情報をたくさん手に入れると同時に、自分が経験した過去の情報や知識をすべて考えあわせて、いま自分がどういう行動をとるかを判断しなければいけない。その全部のものを考えあわせて判断する場が、前頭連合野でおこなわれるワーキングメモリーです。それが<sup>⑤</sup>前頭連合野のいちばん大きなはたらきです。

ワーキングメモリーを上手に使う方法をつけることはとても

大切だ、と私は考えています。目の前の情報だけにとらわれずに、自分のもっている知識、たとえば本などで調べてみたり、いろいろな人の経験、自分の経験、あるいはおじいちゃんおばあちゃんの経験を聞いてもいいです。そういう経験をもとにするとか、そうやってたくさん情報を使って判断しなさいと教えるのが、教育の一つの大きな目的だと思います。

インターネットの断片的な情報や、本を一冊読んだだけで全部を判断していたら、ものすごく偏った行動になってしまいうでしよう。そういったことを、教育の場では教えないけません。だから、ワーキングメモリーは未来のためにあるのです。

【岩田 誠『上手な脳の使いかた』より】

※ 前頭葉：大脳半球の中心の溝より前にある部分。

※ 感情の荷札：ある出来事が起きたとき何かを感じると、その出来事と感情が結びついて記憶が形成されること。

問一 —— 線部 a ~ d について、漢字はその読み方を平仮名で書き、カタカナは漢字に直しなさい。(漢字は楷書で正しく書くこと)

問二 空欄 I・II に当てはまることばを、次のア~カからそれぞれ一つずつ選び、その記号を書きなさい。(同じ記号は二度使えません)

ア それとも    イ つまり    ウ しかし  
エ また        オ さて        カ たとえば

問三 —— 線部ア~オの中で、品詞の異なるものを一つ選び、その記号を書きなさい。また、その異なるものの品詞名を漢字で書きなさい。

問四 空欄 ① に当てはまることばとして最も適切なものを、次のア~オから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 思考    イ 行為    ウ 認識  
エ 将来    オ 意識

問五 — 線部②について、これはどのような定義ですか。それを説明した次の文の [ a ] [ b ] に当てはまることばを、それぞれ本文中の — 線部②より前の部分から漢字二字で抜き出して書きなさい。

[ a ] とは結果として [ b ] につながるものであるという定義。

問六 — 線部③について、ワーキングメモリーが思考において果たす役割はどのような役割ですか。それを説明した次の文の [ a ] [ c ] に当てはまることばを、それぞれ四字で本文中から抜き出して書きなさい。

[ a ] から入ってくる [ b ] に対して、自分自身の [ c ] をもとに行動を選択する役割。

問七 — 線部④について、その理由として最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア マイナスの記憶はよい記憶よりも思い出しやすいため、行動選択をするときに参考にしやすいから。

イ マイナスの記憶があると、自分にとってマイナスになる状況が起きたときの対処法を早めに判断できるようになるから。

ウ マイナスの記憶があれば、選択すべきでない行動を排除し、自分にとって有利なことを見極めやすくなるから。

エ マイナスの記憶を覚えておかないと、行動選択をするときにマイナスになる選択肢を無意識に再び選んでしまうから。

オ マイナスの記憶によって回避すべき行動の順位づけがなされ、順位の高い行動だけは確実に避けるようになるから。

問八 ――線部⑤とは、何ですか。最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 現代社会についての情報や知識、自分自身の体験や見聞を根拠に、これから起こり得る出来事を予測すること。

イ 将来良い選択をするために、過去の自分の行動と、その結果もたらされた自分に対する不利益を記憶すること。

ウ いま自分がとるべき行動を判断するために、かつて自分が経験した出来事や、見聞を通して得た情報を整理すること。

エ 他者の意見や判断、かつて自分自身の身に起こった出来事などで判断せず、いまの自分の判断で未来を選び取ること。

オ 現在についての情報や、自分自身の過去の経験から得たもののすべてを考えあわせ、いまとるべき行動を判断すること。

問九 この文章で書かれている内容に当てはまることとして最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 過去を基準にして成功につながる判断を選ぶことで、よりよい未来がもたらされるので、それに活かされる過去のマイナスの記憶が記憶全体の大部分を占めている。

イ 人間の思考や判断にはワーキングメモリーが大きくかわっているので、教育を通して脳や神経のはたらきをより活性化させるようにすることが重要である。

ウ 人間の判断は、前頭葉の前頭連合野で行われるという研究結果が出ており、未来をよりよいものにするために、そのはたらきの重要性に気づくことが必要である。

エ いま目の前に示されている情報だけにとらわれるのではなく、自分が得た多様な経験や情報を駆使し、正しい判断ができるように教えることが教育の目的の一つである。

オ ワーキングメモリーのはたらきで行動を選択し、未来で失敗する可能性をなくすことができることから、ワーキングメモリーは未来のためにこそ存在しているといえる。



二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(指定された字数には、句読点その他の符号も一字として含みます)

「俺(廉太郎)」と弟の弦次郎は同じ高校に通っている。バイオリニストになりたい弦次郎はオーケストラ部に所属し、「俺」はギター部で活動している。オーケストラ部とギター部は音楽祭の出演をかけて競い合っている。しかし、「俺」は祖父の経営する病院を継ぐことになり勉強に専念しようと、ギター部をやめた。そんなとき参加した柔道の試合で、左手を骨折し、全治四週間の診断を受けた。そのことに、弦次郎は「俺」以上につらそうな顔を見せた。

中学入学以来、弦次郎が俺と<sup>a</sup>極力接点を持たないようにしていたのは知っていたし、高校入学時には、面と向かって言われた。『学園内でのお互いの行動には、一切干渉しない』と。

なのに、ギター部をやめたあたりから、その協定を弦次郎の方から破っている。神野や葵や秋山、菅原先生まで動員して、俺を引き止めようとしている張本人が弦次郎だということは、わかっていた。わかってたけど、たとえ弦次郎の頼みでも、これだけは譲歩することはできない。やっぱりギターにも心から打ち込むことができなかった、と思い知らされる前に、部をやめざるを得なくなる。勉強

に専念するためだから仕方ないのだと思い込む……それがいちばん楽なのだと、思った。

俺は、また自分に失望する前に、逃げたのだ。

「心配いらんで、弦次郎。骨折言<sup>ゆ</sup>うてもスパッと折れたきれいな骨折やから、夏休み中には元どおり治るし、左手やから日常生活にもそんなに<sup>b</sup>支障ないしな」

ホラホラここ見てみ、とお袋は軽く笑い飛ばしながら、レントゲンに写った俺の骨を弦次郎に見せている。

元どおり治る、と聞いて弦次郎の顔から少し赤みが引いたようだった。が、突然顔をこちらに向けて、睨<sup>にら</sup>むように俺を見つめた。

「けど、なんで柔道の試合に出たりしたんや。勉強に打ち込むって言うてたのに、友達に頼まれたからって、急に九州まで行って……僕らがあんなに頼んでも聞いてくれへんかったのに……」

さつきと同じちよつと泣きそうなようにも見える赤い目は、やはり怒りのせいだった。

そうかそれで怒ってたのか、と納得はできたけど、ここでこの話を続けていいものだろうか。

「えっと、あんたら、もう診察済んだんやし、兄弟喧嘩<sup>げんか</sup>やったら家でやってくれる？」

私、もうちよつとここでやることあるから出てってや、と俺達を

追っ払いながら、お袋はライトボックスからレントゲンフィルムを外し始めた。

家ではゆっくり話されへんから……と弦次郎が言って、俺達は病院新館の屋上に上った。

季節が違えば散歩している入院患者なんかもあるんだろうけど、夏の炎天下の屋上に人影はない。

ランドリールームに乾燥機はあるけれど、どうしても日光で乾かしたいという軽症の入院患者さんが、物干し棹ざおに洗濯物を干している。風にはためき日差しを反射する下着の白が、目の奥に刺さるように眩まぶしい。

ちようどよくシーツの陰になっていたベンチに、二人微妙に離れて座った。

上半身は陰になっても、コンクリート床の照り返しの暑さはどうしようもない。

「なんか冷たいジュースでも買うてきたらよかったな」

ぼつりとこぼした言葉に対する返事はなく、感情を抑えようとするような抑揚のない口調が俺に問いかけた。

「その怪我けが、わざとかか？」

「わざと骨折とか、そんな無理やて」

いやマジで、わざとは無理だから。俺にそんな勇気ないし、そも

そもそんな勇気は要らん。

自然と二人とも正面向いて座っていたのを、チラッと横を見てみたら、弦次郎はあまり納得してないふうに唇をとがらせていた。

「そんなら訊き方変えるわ。腕折れそうになったとき、折れへんように防ぐ気いなかったやろ？」

こちらを向いてまつすぐ目を見ながら尋ねてきた弦次郎に、一瞬言葉が詰まった。

折れないように防ぐ気がなかった——そう言われればそのとおりすぎて、反論できない。肘関節を決められて痛みが頂点に達したとき、「参った」と※タップすれば骨折せずに済んだはずなのに、俺はそうしなかった。「できなかった」のではなく「しなかった」のだ。

「そう、かもしれん。わざと骨折する気いはなかったけど、骨折を防ごうとはしてなかったかも」

正直に答えると、<sup>①</sup>弦次郎があからさまにため息をついた。

「あのときと、同じか……」

「あのときって？」

思わずオウム返しに問えば、弦次郎は丸い眼鏡に似合わない鋭い目つきで、俺を睨みつけた。

「まさか、あのときも無自覚やったんかよ。僕が落ちたコンクールで自分だけ好成绩取るのが嫌やっていうムカつく理由で、わざとジャングルジムから飛び降りて骨折した、あのときや！」



「あ、いや、あれもわざとやないから。なんか理由もなく『夕日に向かって飛びたいな』で思ただけで」

慌てて弁解しようとする、弦次郎は「あゝ」と声をあげて自分の髪の毛をぐしゃぐしゃとかき乱した。

「もう、嫌や！ わざとじゃなくても、許されへん。なんでそういうもいつも、無意識に逃げようとはつかするねん！ あのときは、あれ以上僕に勝たへんように逃げたし、今回も……ほんまは、ギター部とオケ部で競うのが嫌で、勉強や柔道に逃げただけなんやろ！」

顔を真っ赤にして、ほとんど絶叫するように弦次郎は言った。

俺は、ただ呆けて目を見開いているだけだった。

逃げた、という言葉が、あまりにも正しくて。

こんなに正しく糾弾されたのは初めてで。

② 胸をえぐられるような痛みと、温かな安堵感あんどという相反する感覚に同時に襲われる。

「廉太郎、ホンマは勉強のためにギターやめたんと違うやろ。ホンマは『ギターに本気で取り組むこと』を、早いめにやめたかったんやろ。バイオリンと同じように『上手うまくできて人には褒められるけどイマイチ必死になられへん』ようなことに、ギターでは、なりたくなかったから。そやから、ギター部より必要とされてるって大義名分があれば、あのまま柔道部の一員になってもええとも思ってた。

……違うか？」

「ちが、わない……」

たたきつけるような鋭い口調で、次々と核心を突いてくる弦次郎の言葉に、③ 俺の弱い心すべてが暴かれていく。その弱さから目をそむけるために、いろいろなことから逃げ続けてきた俺を、弦次郎は言葉の縄で絡め取ろうとしていた。

「もしレンが、そのまま柔道部に入ってたとしても、結局今までと同じようなことしてたはずや。二年になって新入部員が入ってきたら、きつとまたわざと手え抜いて、レギュラーを人に譲ってたんやないか」

たぶん、そうだろうと、自分でもわかる。心から柔道を愛し、俺より必死で柔道に取り組んでる後輩がいたら、そいつを差し置いて試合に出る気には、きつとなれない。

「ゲンの言うとおり、かも……」

「ふざけんな！ ④ 人をバカにすんのも、ええかげんにせえよ！」

照りつける日差しが熱量が上がったように感じられるほど、大きな叫び声が響いた。

弦次郎がベンチから立ち上がり、両の拳を握りしめてわなわな震わせていた。

「そんなこと、誰のためにもならへん。そんな、何やっても必死にならへんような奴やつに勝ったかて、うれしい奴なんて誰もおらへんわ。勝ちを譲るようなことされても、空むなしいだけや。……音楽祭の

ことかて、競う前に勝手に<sup>c</sup>ブタイから降りるようなやり方……ホンマ、ふざけんなよ！ 逃げんなよ、レン。ギター部とオケ部じゃ、オケ部が負けるわけないんやから、最初から全力で向かってこいや！ 祖父<sup>じい</sup>さんのために跡継いで医者になるとか、そういうの全部、結局言い訳なんやろ？ ……いまさらギター部に戻ったところで、怪我のハンデがついてしても、全力勝負にはならへんけど。それでも……来年の文化祭まで持ち越しでもええから、ギターとも僕とも、ちゃんと向き合ってくれ。そうでないと許さへんから！ わかったか？ 以上や！」

お互いに本心をさらけだし腹を割ってしゃべったことのなかった三年分……いや、たぶんそれ以上の言葉数を一気に使って、弦次郎はすべてを言いきった。

俺自身がずっとごまかし続けていた、俺の心の弱さすべてを、白日の下にさらけだしてくれたのだ。

「わか、った……」

息を詰めて聞き入っていた俺は、小さな声でそれだけしか言えなかった。

急に脱力したようにベンチに座り込んだ弦次郎も、さっきまでとは全然違うやわらかな口調で言った。

「ごめん。きつい言い方して。でも、僕の……自分の気持ちは自分で口に出さなかったら、他人にわかしてもらえないはずがないって、

思たから。レントゲンみたいに、誰にでもわかるようにハッキリ映し出して見せることはできへんけど、それでも、できるだけ正直に、思てること、言うてみた」

さっきほどの鋭さはないが、弦次郎はまた顔を上げ眼鏡の奥から俺を見つめた。

「廉太郎も、言いたいことあったら、ちゃんと言うて欲しい。僕だけ言いつ放しな人は、フェアやないから」

俺の言いたいことってなんだろう。

弦次郎に言われて再認識した、逃げてばかりの自分の弱さ・卑怯<sup>きせう</sup>さに愕然<sup>がくぜん</sup>として、それ以外には特に何も……。

「あっ！」

「なんや、急に大声出して」

夏休み中、いや正確にはその前からずっと、気にかかっていたことを思い出した。

「弦次郎も、逃げんといて欲しい」

「僕は、なんも逃げてへん……」

「逃げてるやん。バイオリン弾くの、むっちゃ好きなくせに、自分に才能ないって勝手に決めてあきらめようとしてるのは、逃げてると同じやろ？」

一瞬、呆けたように目を見開いた弦次郎は、すぐに顔を真っ赤にして俺を睨みつけた。

「それは、逃げてるとはちゃう！ 僕に才能なんてないのは事実なんや。コンクールかて、何年も予選落ちばっかやし……。同情だけで見当違いな励まし言われても、<sup>d</sup>メイワクなだけや」

「同情やないって」

弦次郎のバイオリンの音が……心のままに弾いているときの温かくて滑らかなフレージングが、俺は本当に大好きなんだ。音を聴いてると、バイオリンや音楽そのものが大好きなんだってことがわかる。コンクールでも緊張せずにそういう雰囲気が出せれば、きっと次のステップに進めるはずなのに。

瞳を潤ませて俺を睨んでいる弦次郎に、どうしたらこの気持ち、わかしてもらえるのだろう。

さつき弦次郎も言ってたけど、<sup>⑤</sup>いつもは見えない骨もレントゲンなら見えるみたいに、心の中も見せられるレントゲンがあればいいのに。

「俺、ホンマにゲンのバイオリンが好きなんや。同情なんかやない。ゲンはきつとバイオリニストになれるって、本気でそう思てる」

潤んだ目を少し見開いて、かすかに首を振りながら、弦次郎はクシャリと顔をしかめた。今にも泣きそうなようにも、<sup>ほほえ</sup>微笑んでいるようにも見えた。

「僕に才能があるとか、バイオリニストになれるかどうかなんて、決めるのはレンじゃないから」

「うん。決めるのは俺じゃない。けど、<sup>⑥</sup>決めるのは、ゲンでもないやろ。何かにされる才能があるかどうか決めるのは、自分でもほかの誰かでもない。運命に選ばれるかどうかなんやと、俺は思う。自分自身で決められるのは、やり続けるかあきらめるか——それだけなんや」

俺、実は今までそんなこと考えたこともなかったのに。ゲンにわかってもらえるように、考えをまとめて言葉を選んでいるうちに、初めて自分でもわかったんだ。

何かをやり始めたとき、自分にそれが向いているのか、熱意を持ってやり続けられるのか、やり続けていけばモノになるのか……そんなこと、自分自身であーだこーだ考えても、きちんと答えなんて出るわけなかったんだ。

自分自身で決められるのは、やり続けるかあきらめるかの二択だけ。

やり続けた果てに、どんなに努力しても上に行けずに断念することもあるだろうが、それは逃げたわけじゃない。ただ運命に選ばれなかったということ。

今までの俺みたいに、何をやっても先回りしてできない理由を探して、傷が浅いうちにと早めに投げ出して、自分に合うものなんて何もないんだと、斜に構える。そういうのを逃げていているというのだ。

「俺、ゲンには逃げて欲しくない。本当は好きなものを、途中であきらめて欲しくないんや。俺も、もう逃げへんから……ゲンも逃げるなよ」

勝手な言い草だとは思う。けれど、本当に心の底から、今はそう思っているから。

⑦ 弦次郎の、への字にぎゅつと結んでいた唇の端が震え出して、俺を睨みつけていた瞳からポロポロと涙がこぼれ落ちた。

眼鏡を押し上げるようにして、右手の甲で乱暴に目をぬぐいながら、うつむいたままゲンはぶつぶつとつぶやいた。

「……ざっ、けんな……ふざけんな、レンの、アホ、スカタン、カッコつけ！……今ごろになって、なんやねん……」

真つ赤になって頬をふくらませて、盛大に文句を言っている様子が微笑ましく思えて、思わず手を伸ばして素直な黒髪をくしゃくしゃと撫でる。

ムカつくムカつく、と連呼しながら必死になって俺の手を払いのける姿がさらに微笑ましくて、つい疎遠だった間でできなかったぶんのちよっかいを出しまくったのだった。

【風野かぜの 潮うしほ『レントゲン』より】

※ タップ…手で床などをたたいて降参の意志を伝えること。

問一 —— 線部 a ~ d について、漢字はその読み方を平仮名で書き、カタカナは漢字に直しなさい。(漢字は楷書で正しく書くこと)

問二 —— 線部の熟語の組み立てと同じ組み立ての熟語を、次のア ~ オから一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 携帯    イ 新緑    ウ 緩急  
エ 開館    オ 頭痛

問三 —— 線部①について、このときの弦次郎の気持ちを説明した次の文の  に当てはまることばを、本文中から八字で抜き出して書きなさい。

今回の怪我也ジャングルジムから飛び降りたときの怪我也、  
廉太郎に怪我を  ことにあきれている。

問四 — 線部②の「俺」の気持ちの説明として最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 弦次郎との関係が思っていた以上に険悪になっていてつらいが、やっと修復できそうだという希望を感じている。

イ 弦次郎にこれまで隠していたことを知られてとても恥ずかしいが、もう隠さなくてもよいと緊張が解けている。

ウ 自覚していなかった問題を弦次郎から指摘されショックを受けたが、問題に気づけてよかったと安心している。

エ 弦次郎に不満を持たれていることを知って悲しいものの、自分も弦次郎に本心を話せると前向きになっている。

オ 気づかないようにしていた自分の欠点を弦次郎に指摘され苦しいが、取り繕う必要がなくなり気が楽になっている。

問五 — 線部③について、「俺」は自分のどのようなところを

「弱い心」だと感じていますか。それを説明した次の文の

〔 a 〕 〔 c 〕 に当てはまることばを、〔 a 〕 は六字、

〔 b 〕 は七字、〔 c 〕 は四字で、本文全体を踏まえて、そ

れぞれ本文中から抜き出して書きなさい。

先回りして〔 a 〕を探して、〔 b 〕ことなく、自分に

〔 c 〕前に逃げ出してきたところ。

問六 — 線部④とあるが、弦次郎はどのようなことについて、

「俺」が人をバカにしていると感じているのですか。それを説明した次の文の〔 a 〕〔 b 〕に当てはまることばを、〔 a 〕は四字、〔 b 〕は十字で、それぞれ本文中から抜き出して書きなさい。

〔 a 〕にもならないのに、「俺」が〔 b 〕をしていること。

問七 — 線部⑤の「俺」の心情を説明した次の文の

〔 a 〕〔 c 〕に当てはまることばを、〔 a 〕は二字、

〔 b 〕は三字で、それぞれ本文中から抜き出して書き、

〔 c 〕は後のア～オから一つ選び、その記号を書きなさい。

〔 a 〕する気持ちからではなく、弦次郎のバイオリンの音

が〔 b 〕なのでやめてほしくないという自分の気持ちを、弦

次郎がわかっていないことに〔 c 〕を感じている。

ア 緊張 イ あせり ウ もどかしさ

エ 失望 オ おもしろさ

問八 — 線部⑥とあるが、「俺」がこのように言うのはどのような気持ちからですか。最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 弦次郎は自分とは違って、本当に好きなことが見つかったいるのだから、あれこれ考えて時間をむだにしてほしくないという気持ち。

イ 自分の実力を見定めることは、弦次郎や自分のように経験の浅い段階の者にできるわけではないので、あせらないでほしいという気持ち。

ウ やり続けることでしか答えは見えてこないなので、今までの自分のように、傷つく前に可能性を捨てることを弦次郎にはしてほしくないという気持ち。

エ まだ弦次郎が自分を突き放して信頼しようとしなかったことが悔しいので、かたくなになっている弦次郎に強く反論したいという気持ち。

オ 弦次郎のバイオリンの才能はすばらしいものと確信しているの中で、勝手な思い込みであきらめさせてはいけなさと感じる気持ち。

問九 — 線部⑦のときの弦次郎の気持ちとして最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 素直に受け入れることはできないものの、「俺」に才能を認められたことに感激し、自信がわいてきている。

イ 「俺」の身勝手さを悔しく思いながらも、温かい励ましを感じて張りつめていた気持ちが緩んでいる。

ウ 弦次郎の実力を理解せず、勝手な理想を押し付けてくる「俺」に対していつそ理不尽さや耐えがたさを感じている。

エ つらい状況の中、これまでの「俺」とのわだかまりがとけたことがうれしく胸がいっぱいになっている。

オ 「俺」からほめられたことは内心うれしいが、期待に応えられそうにない自分が情けなくみじめさを感じている。



問十 この文章について説明したものと最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 「俺」の視点から場面の大半を描いていく中で、弦次郎の視点に一瞬切り替えることによって、「俺」と弦次郎の気持ちがちがすれ違い、こじれている様子を強調して描写している。

イ 季節特有の情景を具体的に描写することや、比喩を用いて心情を描くことによって、「俺」と弦次郎が本音をぶつけ合う様子を印象的に表現している。

ウ 人物の動きや場面の様子は簡潔に表して、「俺」の独白のような心情描写で場面のほとんどを展開させることで、「俺」が成長していく様子をいきいきと描いている。

エ 人生が思いどおりにいかないという教訓や現実社会の厳しさを、「俺」の怪我や弦次郎がバイオリンをあきらめようとするエピソードによって表現し、問題提起する描写をしている。

オ 弦次郎と「俺」のやりとりを簡潔なことばでテンポよく描くことによって、二人の関係が緊迫する中でもさわやかな雰囲気をもたせ、心がつながり合っている様子を表現している。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(指定された字数には、句読点その他の符号も一字として含みます)

ある君達※きんだちに、しのびて①通かよふ人やありけむ、いとうつくしき児ちこ

さへ※い出いで来にければ、②あはれとは思おもひきこえながら、きびしき

※片かたつ方やありけむ、絶え間がちにてあるほどに、思おもひも忘れず、

いみじう慕こふがうつくしう、ときどきは、※ある所に渡わたしなどする

をも、「※いま」なども言いはでありしを、ほど経へてたちよりたりし

かば、いとさびしげにて、めづらしくや思おもひけむ、かき撫なでつつ③見

るたりしを、④え立ちとまらぬ事ありて出いづるを、⑤ならひにけれ

ば、例れいのいたう慕こふがあはれにおほえて、しばし立ちとまりて、

「⑥さくらばいざよ」とて、かき抱いだきて出いでけるを、いと心苦しげに

見みおくりて、前まへなる※火取ひとりを手てまさぐりにして、

⑦子こだにかくあくがれ出いでは※薰物たきものの

ひとりやいと思おもひこがれむ

としのびやかに言いふを屏風びやうぶの後うしろにて聞ききて、いみじうあはれにおほ

えければ、児こもかへして、そのままになむなむられにしと。

【『堤中納言物語』より】

※ 君達…姫君。

※ 出で来にければ…生まれたので。

※ 片つ方…通ってくる男の本来の妻。

※ ある所に渡しなどする…子供を男の住むところに行かせる。

※ いま…今すぐ返して欲しい。

※ 火取を手まさぐりにして…香をたく香炉を手で撫でながら。

※ 薰物の…香をたいて。

問一 —— 線部①・③を現代仮名遣いに改めて、すべて平仮名で書きなさい。

問二 —— 線部②の解釈として最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 君達は通ってくる人をすばらしいと思い申し上げて
- イ 君達も通ってくる人も互いに幸せだと思っていたが
- ウ 通ってくる人は君達のことをみじめだと思い申し上げて
- エ 通ってくる人は君達をいとしいと思ひ申し上げているが
- オ 君達は通ってくる人をひどい人だと思ひ申し上げつも

問三 —— 線部④の現代語訳として最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 立ち止まることができない用事があつて
- イ 立ち止まることができない理由があつて
- ウ 立ち止まろうとする意志があつて
- エ 立ち止まってしまった事情があつて
- オ 立ち止まるであろう予定があつて

問四 —— 線部⑤は、子供のどのような様子を表していますか。最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 父から今日は一緒に出かけないと言われて、素直に従っている様子。
- イ 父に連れていかれることが習慣になっていて、今日もついでいこうとしている様子。
- ウ 父に優しく頭を撫でられて、寂しかったことも忘れずっかりなついている様子。
- エ 父とあまり会えないことに慣れていたので、母親にばかり甘えている様子。
- オ 父と久しぶりに会えたので何でも教えてもらおうとして、ずっとつきまとつている様子。

問五 —— 線⑥のことばを聞いた君達の心情が読みとれることばを本文中から七字で抜き出して書きなさい。

問六 ――線部⑦の和歌にこめられた心情として最も適切なものを、次のア～オから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア ここで一人きりで過ごすことになるのなら、いとしい人をうらんでしまうという思い。

イ 子供がうれしそうにしている様子を見ると、自分も幸せに感じるという思い。

ウ 子供も自分も、いとしい人のことをずっと恋しく感じているという思い。

エ 素直に恋しいと言える子供のことがかわいらしく、うらやましいという思い。

オ 自分だけ取り残されると、いとしい人がもつと恋しくなるという思い。

問七 本文の内容を要約した次の文の [a]・[b] に当ては

まることばを、[a] は五字、[b] は三字で、それぞれ本文中から抜き出して書きなさい。

君達のもとに通う男は、事情があつて「[a]」にしか君達のもとを訪れることができなかったが、君達の詠んだ和歌を聞き、「[b]」と感じてこの日はそのままそこに留まることにした。

問八 「堤中納言物語」は平安時代に成立した作品ですが、同じ時

代に成立した作品を、次のア～オから一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 万葉集

イ おらが春

ウ 平家物語

エ 更級日記

オ 東海道中膝栗毛